

私のオーストラリア

ウスイアスミ

一九歳の時、私は、単身オーストラリアに渡った。こう書くと、聞こえがいいけれど、その時の私は、持病が悪化し大学を中退し、家族とも上手くいかず、失恋までして、最悪な状態だった。私のオーストラリア行きは、夢を持って向かうというよりは、その現実から逃げ出したかったという方が大きかった。

それでも、旅立ちの日、見送りにきた母の前で、私は、号泣した。たった一人で、見知らぬ土地。本当に不安だった。

成田空港から八時間程で、目的地であるオーストラリアのブリスベンに到着した。ホストファミリーは、とても親切だったけれど、その後三日間は、夜一人で泣いた。到着して一週間後に、語学学校に通い始めた。その学校には、韓国人、中国人、ブラジル人、インド人と、たくさんの方の人達がいた。

ある日、そのうちの一人である中国人の女性と出かける事になった。その当時の私は、あまり人と関わろうとしていなかった。その日出かける事になったのも、その彼女が、半ば強引に、私を誘ったからだだった。

彼女と二人、ブリスベンの中心地付近を歩いていると、ふいに、彼女が、

「アスミ」

と、話し掛けてきた。

「ホワイアーユー ルッキン アト ジャスト アンダー？」

と、私の顔を覗き込み、そう言った。私は、最初何を言われているのかわからなかった。もちろん、私の英語力が乏しかった事も理由であるが、ルッキン アト ジャスト アンダー（下ばかり見ている）という意識が、私には全くなかったのだ。

彼女は、微笑み、私の肩を掴むと、上を向かせ、たどたどしい英語でこう言った。

「前を見て。前を見ていれば、前向きな世界が見えるから。あなたが見る世界は、あなたの見る角度で変わるのよ」

私は、衝撃を受けた。それまでの私は、嫌な事を、見ないように見ないようにと、下ばかり見て、前を向く事を忘れていたのだった。私は、彼女に、自分の境遇など一切話してはいなかった。けれど、彼女は、私の様子から何かを察し、その日私を連れ出してくれた事を知った。

「人というのは、自分の鏡よ。相手の態度は、自分のその人への態度なのよ。だから、笑っていた方がいい。信じていた方がいい。そうしたら、相手も笑ってくれるし、信じてくれるから」

と、彼女は、そう言つて、「スマイル。スマイル」と、笑つてみせた。私も、笑つた。それから、三週間程で、私は、帰国する事を、決意した。ほんの一月程で、私はとても元気になっていた。その一月の中で、私は、たくさん学ぶ事ができた。

帰国まで、あと一週間という時、ホストファミリーの友人である日本人女性と話す機会があった。ホストファミリーの家の中では、母国語厳禁であったが、その時だけは、許された。

私は、今までどんな事があったのかを、彼女に語った。彼女は、黙つて聞いた後、自分のつらかった経験を、話し始めた。会うと、いつも明るい彼女からは、想像もできないような苦労がその話の中にあった。

話が終わりに近づいた時、彼女は、

「人には、使命があるんだって。人は、その使命を果たすために生まれて、その使命を果たして死ぬのだそうよ」

と、言った。彼女は、私の使命が何であるとか、自分の使命が何であるとかは、言わなかった。けれど、つらい事も、使命の一つと、考えているようだった。

「色んな人を見て、関わって、学ぶ事は、沢山あると思う。残りの日々、ホストファミリーの様子をしっかり見るだけでも、勉強になると思う」

彼女との話は、そこで終わった。その時の私は、その意味の半分も理解できていなかったように思う。今、考えてみると、ホストファミリーの背負っているもの、考え方、接し方、たくさん考える所はあったのだが。

最後の日。見送ってくれたホストファザーの、

「シーユー（また会おう）」

という言葉は、今も忘れていない。

「結婚式、きつと行く事はできないけれど、声はかけてね」

と、いう言葉も。

結婚式をおこなう予定は、当分ないけれど（笑）、いつの日か、再び、オーストラリアに行つて、

「サンキューベリーマッチアトザットタイムアイカムトゥシーアズプロミストウ（あの時はありがとう。約束通り会いに来ました）」
と、笑顔で、ホストファミリーに、会いに行きたいと思う。